

益城町文化財報告 第8集

益城町の中世山岳寺院

じょうらくじ ふくでんじ あんようじ
(常楽寺・福田寺・安養寺)

1985

熊本県 益城町教育委員会

序 文

益城町は熊本平野の東端に位置し、有史以前より地味豊かで先人の住み易い場所でありました。この自然環境を背景として飯田山常楽寺と尾峰山福田寺は、中世山岳仏教の中心的存在として経営されたと考えられます。しかしすでに数世紀を経た現在、その遺構は多く叢中に没し、かつての繁栄をしのばせるものはありません。半面益城町は熊本空港を始め、テクノポリスの建設と開発が進み、かつての静寂な山中にも、開発が着手される事が予想されるため、今後文部省より3ヶ年の補助事業の認可をうけ、両寺跡の調査を実施しました。両寺院の学術調査は今回が最初であるので、今までの不明の分にもいくらかは解明の光があたったと考えられます。ここに報告書を刊行し、大方の研究の一助ともなれば幸いです。

昭和61年3月

益城町教育委員会 教育長 **安田 國司**

例 言

1. 本書は文化庁の補助を受け、昭和58年より三ヵ年計画で益城町が実施した「遺跡詳細分布調査」（益城町の中世山岳寺院）の報告書である。
2. 調査は昭和58年度に飯田山常楽寺を、59年度には常楽寺及び尾峰山福田寺、大楠山安養寺を、60年にはこれらの補足調査及び整理報告書の執筆をした。
3. 報告書の執筆分担は次のとおりである。
 - 一 序 章
 - (一) 調査に至るまで
松野國策（益城町文化室長）
 - 二 飯田山常楽寺の調査
 - (一) 常楽寺の石塔群とその他の遺物
島津義昭（熊本県文化課学芸員）
 - 三 尾峰山福田寺の調査
 - (一) 福田寺の石塔群とその他の遺物
高木正文（熊本県文化課学芸員）その他の章節については緒方勉が執筆した。
また、これら寺院に関する文献について熊本大学教授森山恒雄氏の手を煩わし、民俗調査については同大学助教授安田宗生氏に依頼した。
4. 現地調査にあたり安達武敏、作本巖、福永泰、山本光晃等の各氏の協力を得、また安達氏には整理についても協力してもらった。
5. 現地の写真については、永田昭一氏及び緒方があたり、常楽寺の本尊、安養寺旧蔵の薬師三尊については大倉隆二氏の提供を受けた。
6. 本書の編集は緒方が担当した。

本文目次

一 序 章	1
(一) 常楽寺及び福田寺の位置	1
(二) 調査に至るまで	1
二 飯田山常楽寺の調査	3
(一) 寺院とその他の遺構	3
1. 常楽寺の現状	3
2. 常楽寺周辺(村跡)	4
3. その他(下の山の板碑・田口弾正墓)	9
(二) 常楽寺石塔群とその他の遺物	13
(三) 常楽寺調査のまとめ	19
三 尾峰山福田寺跡の調査	21
(一) 福田寺跡調査の概要	21
1. 寺屋敷	21
2. 鐘撞堂周辺	26
3. 坊主墓と片平山	26
4. 鬼の窟周辺	31
5. 一の香	32
6. その他「虎が塔」など	33
(二) 福田寺の石塔群とその他の遺物	39
(三) 福田寺跡調査のまとめ	65
四 大楠山安養寺跡の調査	65
(一) 寺屋敷周辺	67
(二) 安養寺周辺の関連資料	71
1. 左の目八幡宮とその周辺	71
2. 安養寺の鬼瓦	72
3. 現存する安養寺所伝の仏像	72
(三) 安養寺跡調査のまとめ	74
付1. 飯田の民俗	安田宗生 76
付2. 益城町の中世山岳寺院関係文献史料	森山恒雄 96

挿 図 目 次

第1図	常楽寺及び福田寺・安養寺位置図	2
第2図	常楽寺とその周辺	5
第3図	旧飯田村地割（略図）	6
第4図	飯田山常楽寺全体図	7・8
第5図	常楽寺墓地周辺	10
第6図	飯田山常楽寺境内実測図	11・12
第7図	宝篋印塔・五輪塔実測図	15
第8図	層塔実測図	16
第9図	常楽寺周辺の遺物	17
第10図	常楽寺周辺の石塔銘文	18
第11図	福田寺と安養寺跡周辺図	21
第12図	寺屋敷・鐘撞堂及び大門跡	24
第13図	坊主墓の石塔	25
第14図	片平山の石塔	27
第15図	鬼ノ窟周辺	29
第16図	鬼の窟	30
第17図	一の香1における石塔分布	31
第18図	一の香2における石塔分布	33
第19図	福田寺の石塔群（寺屋敷1）	38
第20図	福田寺の石塔群（寺屋敷2）	39
第21図	福田寺の石塔群（鐘撞堂跡1）	43
第22図	福田寺の石塔群（鐘撞堂跡2）	44
第23図	福田寺の石塔群（鐘撞堂跡3）	45
第24図	福田寺の石塔群（坊主墓1）	46
第25図	福田寺の石塔群（坊主墓2）	47
第26図	福田寺の石塔群（坊主墓3）	48
第27図	福田寺の石塔群（坊主墓4）	49
第28図	福田寺の石塔群（坊主墓5）	50
第29図	福田寺の石塔群（片平山）	52
第30図	福田寺の石塔群（片平山東麓に転落したもの）	53
第31図	福田寺（虎が塔）	55
第32図	福田寺（虎が塔銘文拓本）	56
第33図	福田寺（岩崎家石塔）	57
第34図	福田寺（岩崎家五輪塔銘文拓本）	58
第35図	福田寺のその他の遺物（鐘撞堂跡）1	60
第36図	福田寺のその他の遺物（鐘撞堂跡）2	61
第37図	福田寺のその他の遺物（鐘撞堂跡）3	62
第38図	安養寺跡地形図	66
第39図	板碑実測図1（天文廿二年碑）	68
第40図	板碑実測図2（永禄十年碑）	69
第41図	板碑拓本（天文廿二年碑部分）	70

目次

第1表	常楽寺境内石造物一覧表	14
第2表	寺屋敷の石塔群一覧表	39~40
第3表	鐘撞堂跡の石塔群一覧表	40~42
第4表	坊主墓の石塔群一覧表	47・48・50・51
第5表	片平山の石塔群一覧表	51・53
第6表	片平山東麓に転落した石塔群一覧表	54
第7表	虎が塔一覧表	54
第8表	岩崎家石塔一覧表	59

図版目次

図版 1	飯田山遠望	1
図版 2	一町地藏 1	2
図版 3	一町地藏 2	3
図版 4	一町地藏 3	4
図版 5	一町地藏その他	5
図版 6	常楽寺境内	6
図版 7	常楽寺の石塔	7
図版 8	常楽寺の仏像 1	8
図版 9	常楽寺の仏像 2	9
図版 10	常楽寺墓地	10
図版 11	飯村家墓地の石塔	11
図版 12	板碑と田口弾正墓	12
図版 13	つづの山遺跡と「重福寺阿弥陀石」	13
図版 14	福田寺の麓集落・内寺	14
図版 15	朝来山（上宮）遠望	15
図版 16	一の香 1 の石塔群	16
図版 17	坊主墓の石塔群	17
図版 18	寺屋敷、鐘撞堂及び片平山周辺	18
図版 19	福田寺を離れた石塔	19
図版 20	福田寺周辺「三竹ようご石」	20
図版 21	鬼ノ窟及び一の香 2	21
図版 22	安養寺寺屋敷の現況	22
図版 23	石塔と鳥居篇額	23
図版 24	「大楠山」と陽刻した瓦	24
図版 25	安養寺を去ったほとけ達 1	25
図版 26	安養寺を去ったほとけ達 2	26

一 序 章

(一) 常楽寺及び福田寺の位置 (第1図)

飯田山(標高431m)は、熊本市の東南部にある釣鐘状の山で、その山頂の西北250mばかりのところ¹に常楽寺がある。これは行政区分のうえから熊本県上益城郡益城町大字小池字飯田に属する。

また尾峰山福田寺は、益城町大字福原字福田寺にあり、寺域は朝来山(標高465m)を上宮としてその西斜面に占地する山岳寺院である。

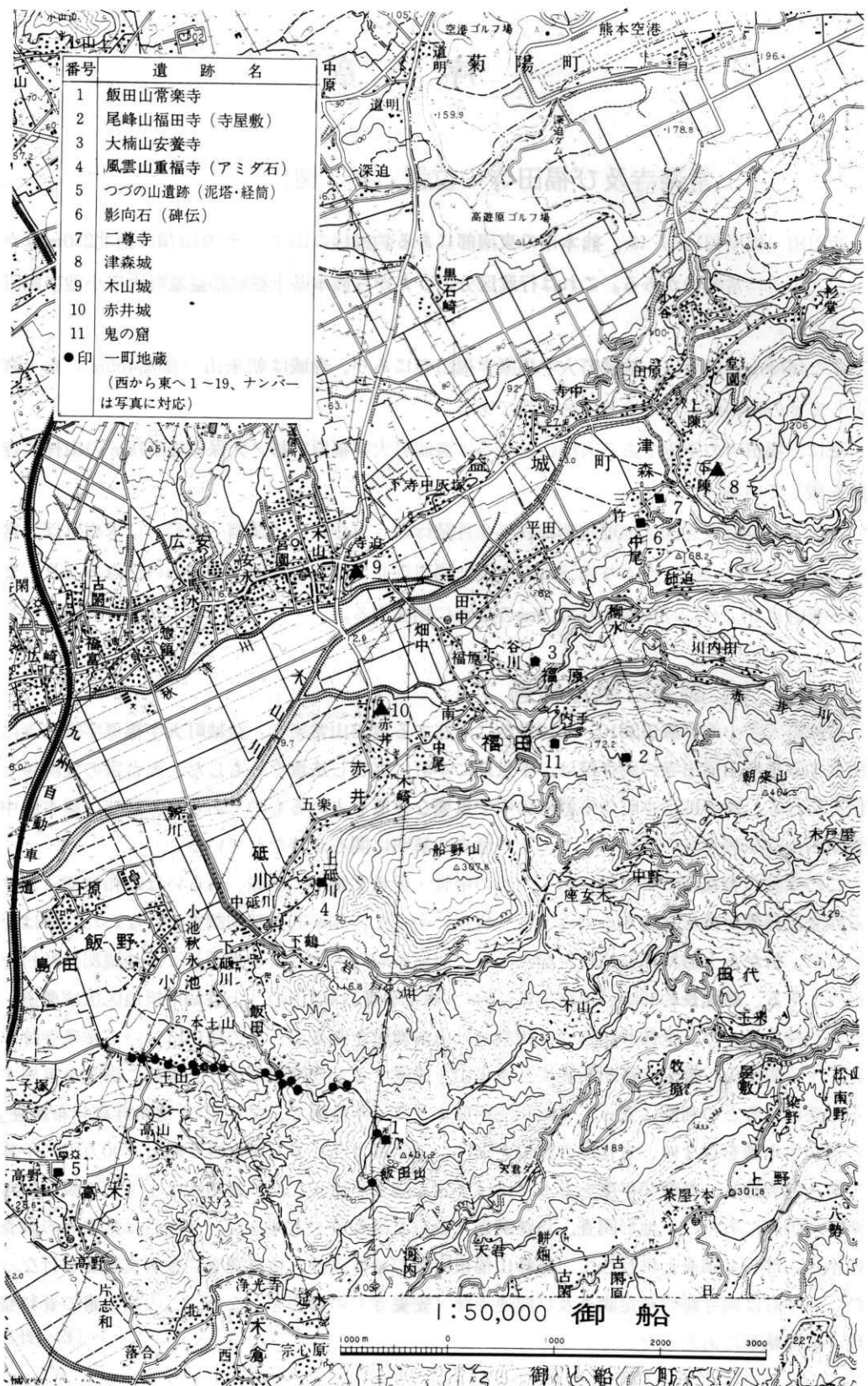
更に、福田寺の末寺である大楠山安養寺は益城町大字福原字杉ノ久保の標高70mの山林に寺跡を残している。

これらの寺院址を国土地理院昭和49年9月発行の5万分の1、図幅「御船」に求めれば、常楽寺は北より21.4cm、西より14.8cmの交点、福田寺北より13.8cm西より19cmの交点あたり、また安養寺は北より12.2cm西より17.5cmの交点に相当する。(緒方)

(二) 調査に至る経過

益城町大字小池字飯田3810~3812番地に所在する飯田山常楽寺、益城町大字福原字福田寺に所在する尾峰山福田寺の両寺院は、中世期に本町に存在し法燈をともした、天台宗の寺院跡と伝えられる。両寺院は本町の宗教史の中で重要な位置を占めるものであるが、同時に熊本県中世期の山岳宗教寺院の跡地として、その歴史の解明に関心が持たれている。

この寺院の存在については、いくつかの中世・近世文書への記載、あるいは昭和初期における探査記録等が多少存在するのみであり現在に至るまで体系的な学術調査が行なわれた事はなかった。折から上益城郡益城町を起点とし、同郡御船町・甲佐町を貫通し、下益城郡豊野村を終点とする、総延長約30km、道路巾員7.5m、総工事費118億円の「上益城平坦地区広域農道」計画が持ち上った。全長30kmのうち何割かは山岳地帯を走るが、その途中において常楽寺跡が存在する飯田山、福田寺跡が所在する朝来山を通過するとの情報により、事前に調査を実施する必要があるとの判断に立って、昭和58年度より3ヶ年計画で、文化庁の「遺跡詳細分布調査」の補助金申請を行ない、文化庁の認可を受けて58年度より、3ヶ年に亘り総計300万円の予算で調査を実施し、今度60年度をもってほぼ予定の調査を完了した。初年度は主として飯田山常楽寺の調査にあたり、地形調査、坊跡調査、金石文調査等を実施した。2年目は常楽寺の調査の不足の部分の調査と併行して、尾峰山福田寺跡の地形調査、坊跡調査、金石文調査を行なった。3年目は両寺跡の補足調査及び関連寺跡(安養寺)の調査を行ない、この報告書の資料整理・原稿執筆にあたった。(松野)



番号	遺跡名
1	飯田山常楽寺
2	尾峰山福田寺 (寺屋敷)
3	大楠山安養寺
4	風雲山重福寺 (アミダ石)
5	つづの山遺跡 (泥塔・経筒)
6	影向石 (碑伝)
7	二尊寺
8	津森城
9	木山城
10	赤井城
11	鬼の窟
●印	一町地蔵
(西から東へ1-19、ナンバーは写真に対応)	

二 飯田山常楽寺の調査

(一) 寺院とその他の遺構 (第4図)

1. 常楽寺の現状

常楽寺入口より仁王門まで約26mの石段からなり、これらの石段は自然石による乱れ積みである。途中、下から約4m上ったところを山道が横切るが、これを境に下方と上方では石段の積み方に相違がみられ、下の方が比較的整然としているのに対して、上の方は抜け石はあるものの、よく乱積みの特徴を示している。石段は下の道路から最上段までの比高13.5mで、傾斜角は下から4mまでのところが大きい。

仁王門

石段を上りつめると正面に仁王門がある。仁王門は3.3×6.6mの木造建築で、両側に「阿形」「吽形」をした木彫の金剛力士像がある。

本堂

仁王門を直進すると、本堂までの間に2ヶ所の石段がある。まず仁王門から15m離れたところに最初の石段が5段積み、ここで約1m上る。この間両側に六基(三対)の石灯籠が石段をはさんで並んでいる。

最初の石段から次の石段までの距離は約13mあり、このあたりが寺域内の広場の役目をしており、鐘楼堂の基壇(4.5×4.5m)もこの一角にある。二番目の石段は九段、石段の高さ約1m70cmを上ると本堂前に達する。

本堂は6.6×6.6mの木造瓦葺の建築で、前面に庇^{ひさし}が突き出している。この仁王門から本堂に通じる主軸の線は、N-108°Eである。

本堂裏手は、約3mの余地を残し、急傾斜の山林で、本堂左手に山頂への登山道(1名女坂)がある。

山王社

本堂と並んで南側約12m離れて山王社がある。山王社は、2.6×4.2mの木造の建物で、山を背に周りを石囲いがしてある。この石囲いには正面が石段の上り口になっていて、それを3～4m直進すると本堂前石段と同様の石段がある。

山王社の南側には、飯田山頂近くにある白山社の鳥居がある。その背後は上り坂になっていて山頂に達するが、これがいわゆる男坂で、坂は女坂に比べて急である。

本堂附近の石造物

本堂前両側には層塔二基が対をなしている。また山王社への上り口石段両側に宝篋印塔各一基がある。北側の一基は文明11年5月24日逆修村山刑部太輔の銘が、他の一基は応永2年3月

17日、阿闍梨祐専為逆修と銘せるもので、いずれも室町期の石造物である。

山王社の北隣りに一字一石塔が、本堂との間のもみじの根元には五輪塔が、層塔にそった石垣上には、宝塔、五輪塔が散乱している。

本堂下の広場の石造物

この空間に鐘撞堂の基壇を残しているが、それに対置するように豪潮の宝篋印塔一基がある。この塔の横及び本堂前石段の両側（石垣下）には五輪塔の他、板碑、石仏等がある。

仁王門北側には一基の板碑がある。板碑のまわりは石囲いがしてあり、碑には元禄の紀年銘がある。

墓地、その他

常楽寺歴代住職の墓は、本堂の南西約100mの小谷を距てた山林中にある。下段には石塔墓13基がある。その中には凝灰岩切石によるものと自然石を集積するものがある。この墓地には五輪塔を転用し、墓石に利用したの数ヶ所が確認されている。道を距た上段の2基は切石による石塔墓である。

さらに、この上約10mの竹林中には、集石を伴った盛上がりが見られ、墓地の可能性が高い。墓地と本堂の間の凹地（谷）には、最奥に井戸があり、その流れをみちびき入れた池が三つある。この一帯は竹林であるが、最下位に位置する池の上が土手になっていて、その上に板碑1基がある。また、この板碑の反対側の土手の裾に石祠と板碑がある。またこの周辺にも五輪残欠が点在している。

また、鐘撞堂より庫裡への下り道坂の曲り角に斜に傾いた板碑一基があるが、銘文は確認出来ない。種字等を彫出していないところを見ると、これら無銘のものは墨書によるものとみられる。

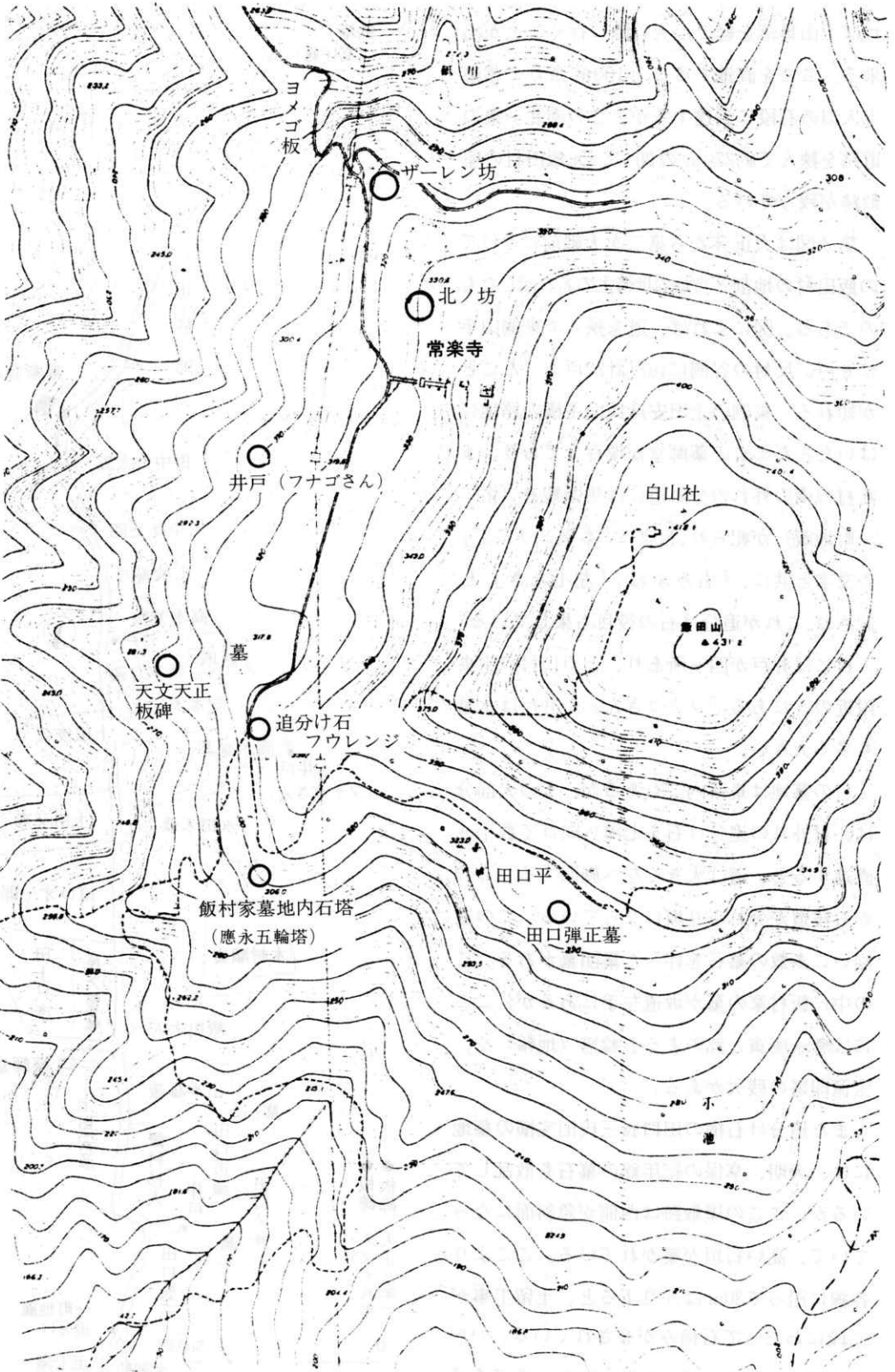
本堂の北側に接する平坦面を「北ノ坊」と呼んでいる。ここには寺坊に関する何等かの遺構のあることが考えられるが、何しろ山林で竹叢に覆われ、時間的制約もあって踏査だけでは遺構が確認できなかった。また「北ノ坊」の北側高圧線鉄塔のある三叉路上方に近世墓が数基あるが、この附近には「ザーレン坊」の呼び名を残している。

村の南端より追分け石を左に折れ、迂廻しながら山道を登ると左手に高圧線の鉄塔がある。この鉄塔周辺にわずかながら、平坦面があることが確認出来る。ここを村人達は「フウレンジ」と呼んでおり、何らかの寺院関係の遺構があったことが考えられるが、現在藪に覆われ、その確認に至っていない。

2. 常楽寺周辺（村跡）

常楽寺周辺にはかつて飯田村があった。現在廃村で、一軒の民家も存在しない。第3図は、かつての村の屋敷地割りと当時のむら人の名前である。

飯田山麓の新屋敷から山道を登ると約一軒で高圧線鉄塔のある分れ道がある。ここを左折す



(図源) 陸奥村田湖白 図 2 常 第 2 図 常楽寺とその周辺

れば下山集落を経て、大谷峠に行くことが出来る。ここを直進すること100m余りで常楽寺入口の石段に到達するが、この南北一条の道路を挟んで約270mの間に、元飯田村の屋敷跡が残っている。

第3図は大正末から第二次大戦前にかけての飯田村の地割と当時の世帯主の名を記したものである。図によれば、道を挟んで東側山手に6戸、反対の谷側に16戸計22戸あったことが知れる。東側の上田安彦氏旧宅横の路地にはいたんだままの薬師堂が現存しており、また村の南の外れの分れ道には馬頭観音(俗に一町地蔵)が祀られ、台座に「本堂ヨリ二丁」の文字と共に、「右みふね」「左七たき」と記され、これが追分け石の役目も果している。

村には井戸が四ヶ所あり、とくに村の中央附近の谷にある「フナゴさん」の井戸は水量も多く大きい。

村の墓地は集落内にもあるが、その大部分は、村外れの追分け石を七滝へ向けて数十m直進すると、道は大きく左へ施回する。ここから枝道が分れ下り坂になっている。この道沿いに多数の墓石を伴った集団墓がある。この中に飯村家の墓が坂道左手にあるが、ここには應永庚寅と銘のある五輪塔(地輪)や、宝篋印塔の残欠がある。

また追分け石横の田口辰三氏旧宅横の墓地には、天明、享保の紀年銘の墓石も散乱しているが、ここの屋敷跡は西側が急斜面になっていて、高い石垣が築かれている。ここより各線に沿って30mばかり下ると、土留工事が二段にわたって石積みがなされている。いづれも幅6~7m、高さ1.5m位のものである。



第3図 旧飯田村地割 (略図)

3. その他（下の山の板碑・田口弾正墓）

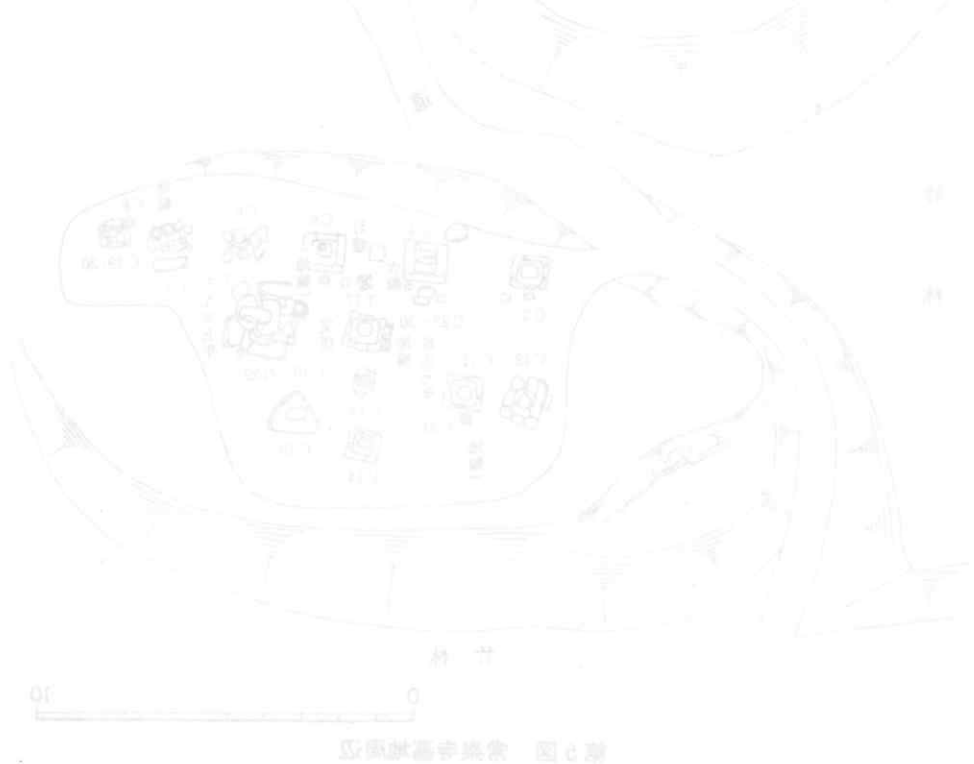
さきの土留めのための石積みから10mばかり離れたところの尾根先に板碑1基がある。これは種子の下に天文十八年^{庚辰}の銘をもつもので高さ約90cmを計る。更に、天正八年銘板碑より5～6m尾根先へ向けて進めば、もう1基の「天文五曆」の板碑がある。この板碑は右に傾き、また後に大きく傾斜している。高さ160cm、幅120cmの大形の板碑である。

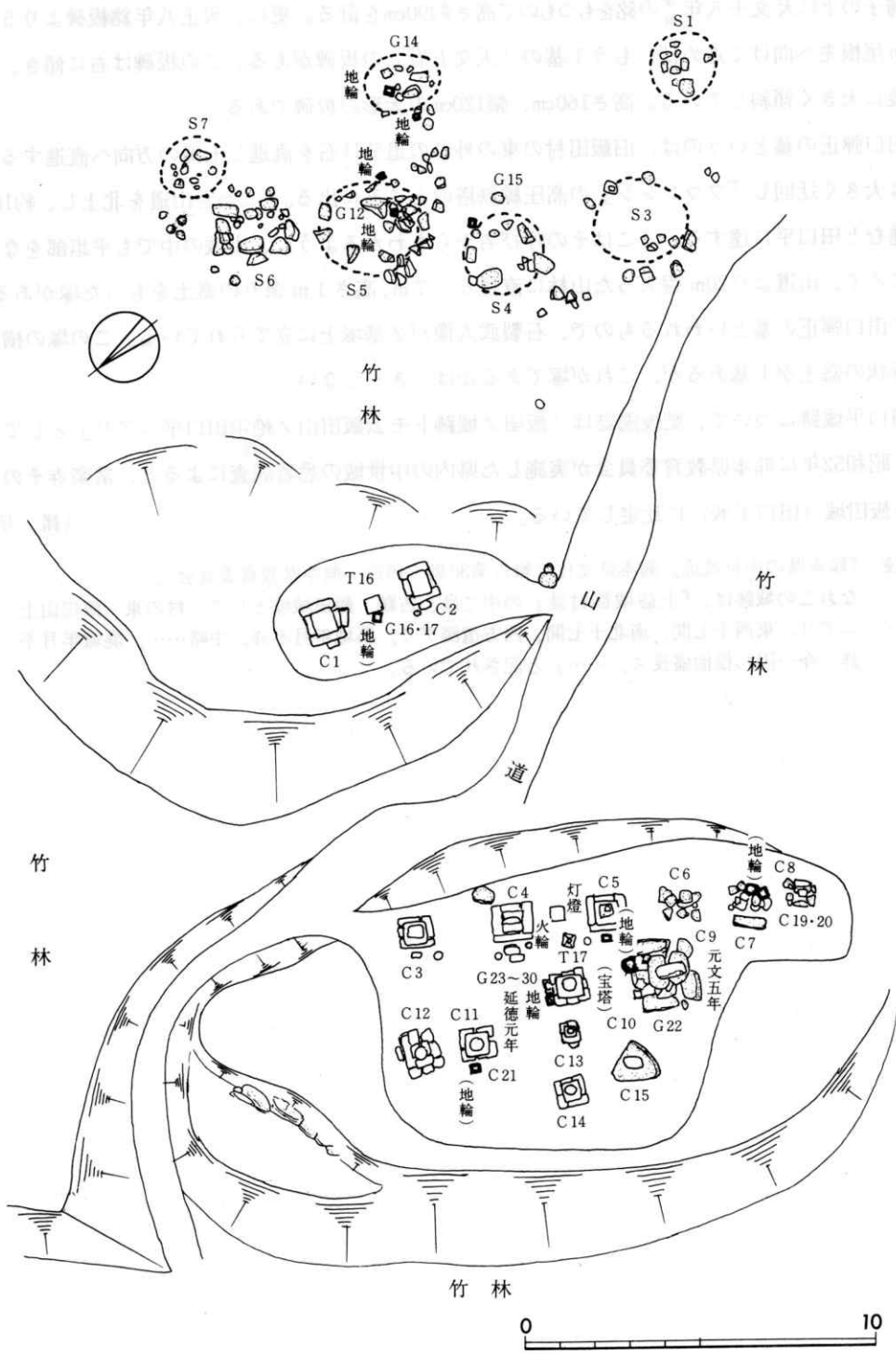
田口弾正の墓というのは、旧飯田村の東の外れの追分け石を直進し七滝の方向へ直進すると道は大きく迂回し「フウレンジ」の高圧線鉄塔のところに出る。そこから山道を北上し、約100m進むと田口平に達する。ここはその呼び名からもわかるように、山域の中でも平坦部をなすところで、山道より20m程入った山林に直径6～7m、高さ1m余りの盛土をもった塚がある。俗に田口弾正の墓といわれるもので、石製武人像が2基塚上に立てられている。この塚の横には塚状の盛土が1基あるが、これが塚であるかはっきりしない。

田口平城跡について、肥後國誌は「飯田ノ城跡トモ云飯田山ノ絶頂田口平ニアリ」としている。昭和52年に熊本県教育委員会が実施した県内の中世城の悉皆調査^注によると、常楽寺そのものを飯田城（田口平城）に比定している。（緒方）

注 『熊本県の中世城址』熊本県文化財報告第30集 1978 熊本県教育委員会

なおこの城跡は、『上益城郡村誌』の中では、古跡 飯田城墟として「村の東 飯田山上ニアリ。東西十七間、南北十七間、四方遺濠アリ。築城年月不詳。中略……。廃城年月不詳。今一円杉松樹盛長ス。……」と記されている。





第5図 常楽寺墓地周辺

(二) 飯田山常楽寺の遺物

石造物

境内に存する石造物のなかで、層塔は比較的有名であるが、その他のものはほとんど知られていない。そこで今回は石造物の悉皆調査をおこなった。境内の石造物の種類と数量は次のとおりである。

1. 五輪塔 (38基)
2. 宝篋印塔 (5基)
3. 板碑 (5基)
4. 層塔 (3基)
5. 宝塔 (2基)
6. 石燈籠 (17基)
7. 石仏 (22基)
8. 道標 (1基)
9. 墓標 (22基)

五輪塔は空・風・水・火・地の各部位が拡散してあり、当初の組み合わせを留めているものはない。なかでも地輪がもっともおおい。紀年名をもつものは二基ある。ともに地輪で墓の基礎として用いられているものに延徳元年(1489)、本堂横に天正7年(1579)の年号がある。

宝篋印塔は相輪部の残欠以外のものには、総て紀年銘をもつ。文明11年(1479)応永2年(1395)等である。宝塔には年号はみられない。板碑には線刻の仏像がみられる。層塔は本堂の両側のものは原位置を留めているとみられる。紀年銘を持たないが、様式より鎌倉期のものとみられる。墓標には、礫を集めたものと石塔婆のものがある。前者を仮に集石墓と本稿では呼んでおく。集石墓には直接年代を示す手懸りを持たないが、塔婆を建立する以前の墓標だと推定される。

その他の遺物

境内及び周辺から、寺院に関係するとみられる遺物を採集した。第9図に代表的なものを図示し、説明を加える。

1～5は瓦である。表採場所は境内の南側、鐘楼から二つの池に続く斜面の途中である。多量の瓦が散乱している。完形品はなく、小破片が多い。1・3・4は平瓦で一面に格子の叩き目を持つ。1は赤変して、脆い。4は大部分が剥離している。叩きの反対面は1に、目の細かい布目が残っている他は、平滑である。2は丸瓦。4と同様の叩き目をもつ。5は軒平瓦で、幅の狭い顎を持つ。瓦当に細線の剣形と同心円を付す。表裏とも平滑である。

6・7・9は青磁である。寺の下の道で採集。6は薄い青色。蔓の刻線がある。復元すれば器高7cm、口径15cmになる。7は緑色をなす。見込みに草紋がある。器表には鎬を持つ蓮華紋を施す。9は緑がかつた鉛色をなし、貫入をみる。

8は石鍋の破片。鏝の部分で、表面には煤が付着して、断面は赤変している。石段で採集。

以上の他にも、小破片で図示出来ないが、常楽寺の水源の一つとみられる船子(ふにゃんご)と呼ばれる泉の周辺でも、古瓦や須恵質土器を採集している。これらは中世の遺物である。

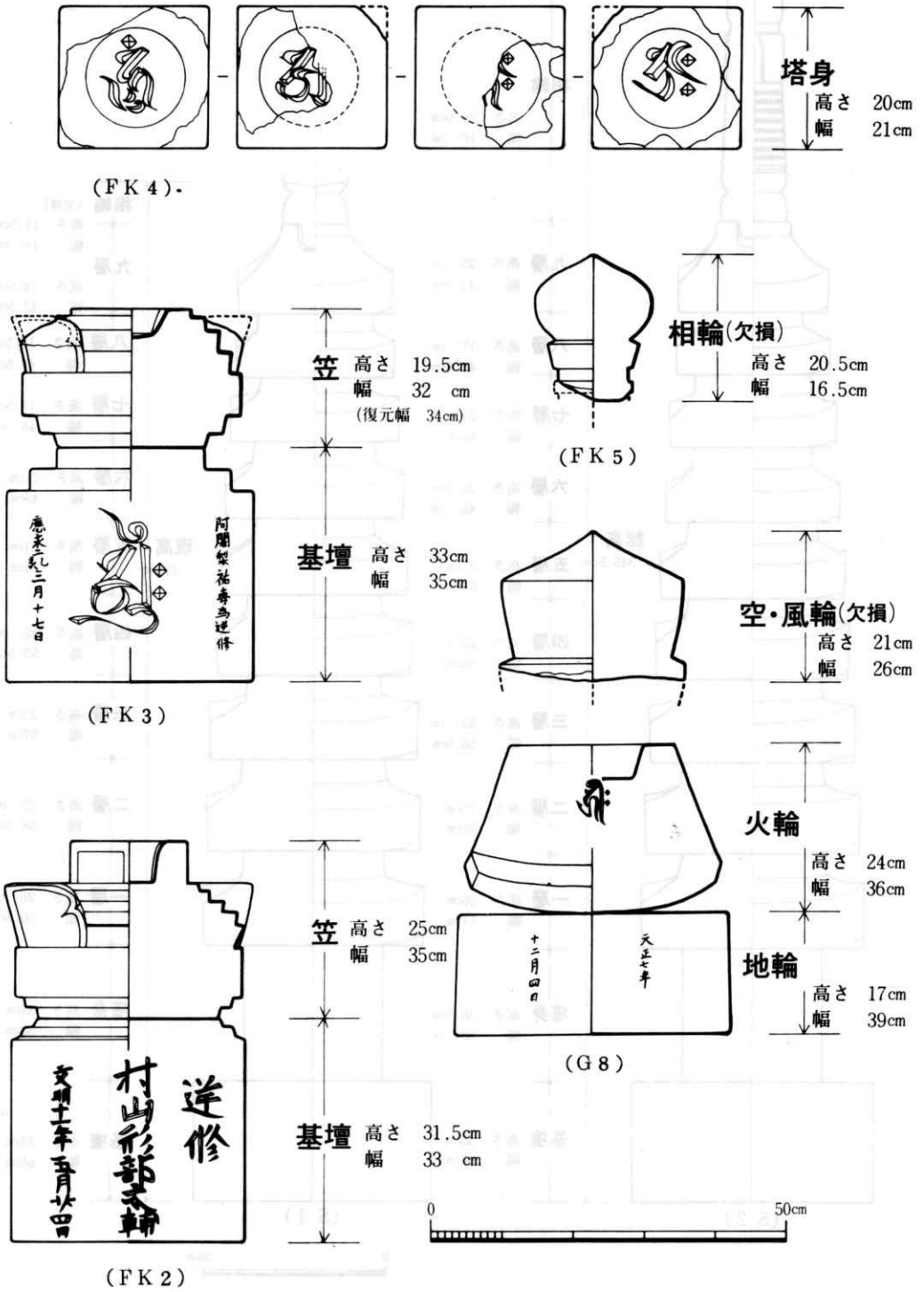
(島津)

第1表 常楽寺境内石造物一覧表

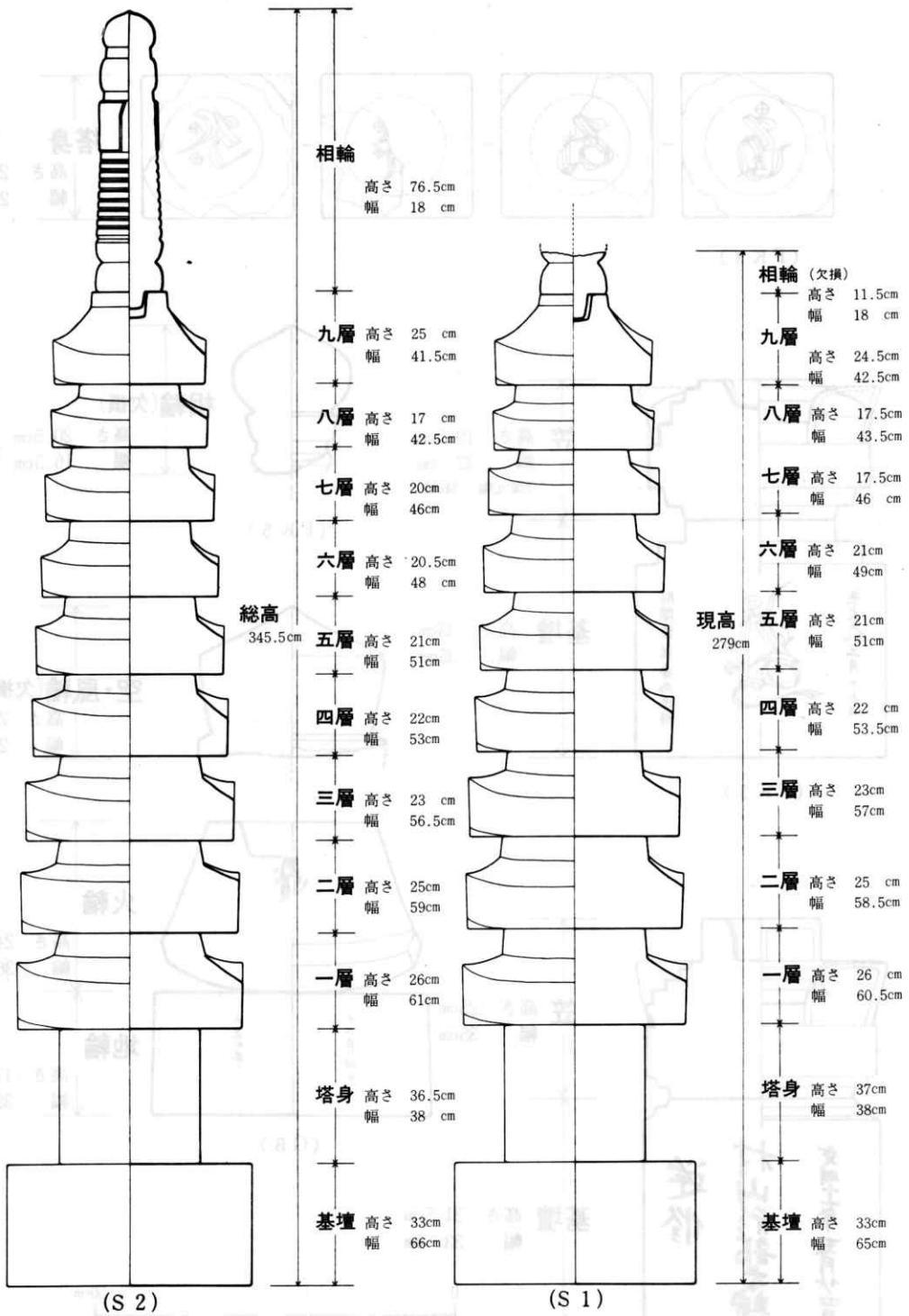
層塔		石仏										石燈籠		五輪塔											
3	2	1	番号	22	7	6	5	4	3	2	1	番号	17	1	番号	38	31	30	29	9	8	7	1	番号	
			銘				地藏菩薩				地藏菩薩	尊像・銘文			銘										銘
			文									文			文										文
			西曆									西曆			西曆										西曆
			石材									石材			石材										石材
			備考									備考			備考										備考
			(鎌倉) 花崗岩																						
			花崗岩																						
			擬灰岩																						
			九重層塔																						
			九重層塔																						
			屋根部が三層分あり																						

○本一覽にしなかつたものに集石(墓)七基、経塚(一石一字塔)一基、道しるべ一基がある。

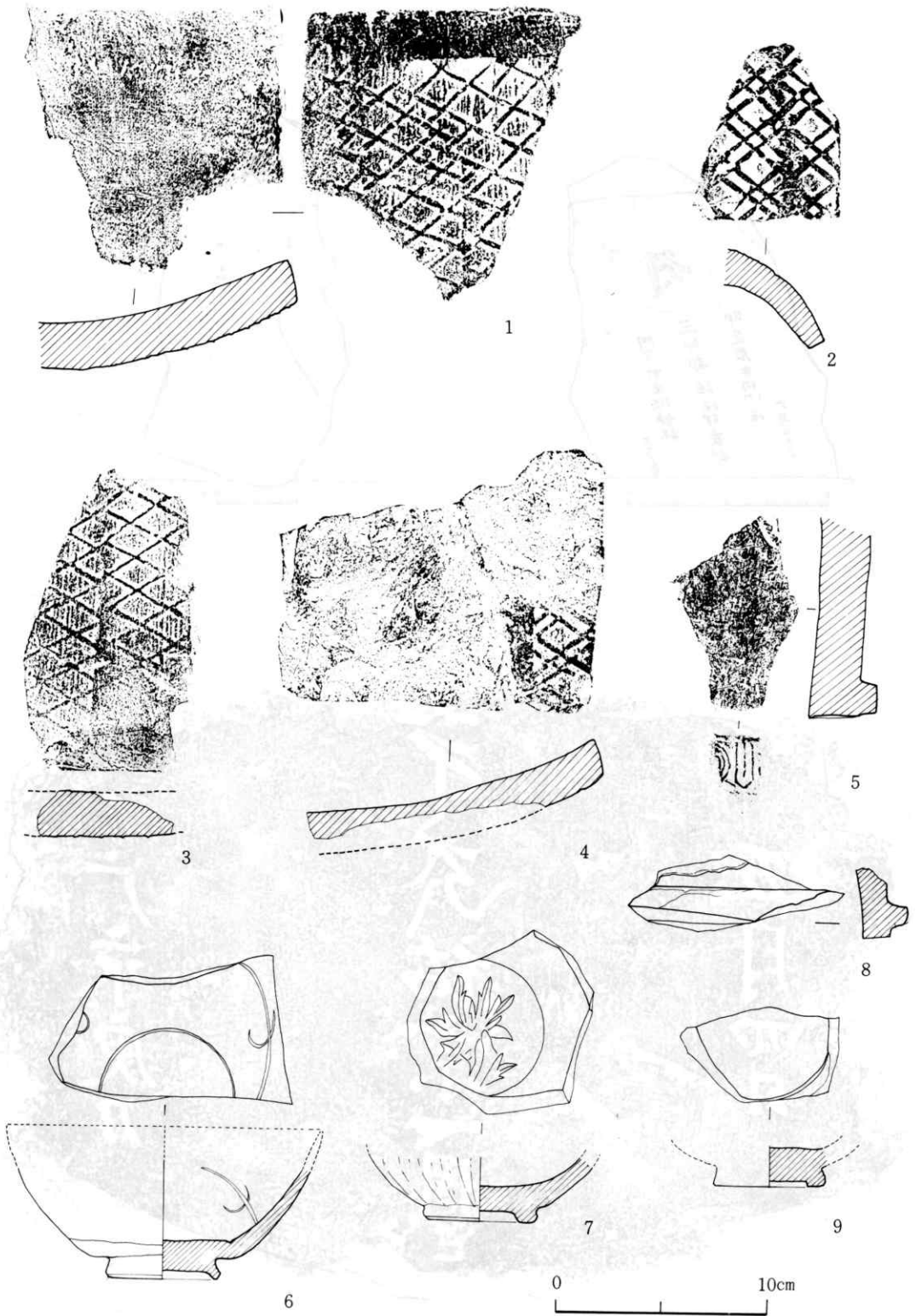
切石墓													宝塔				宝篋印塔					板碑					
15	14	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号	2	1	番号	4	3	2	1	番号	5	4	3	2	1	番号	
												尊像・銘文			銘												主尊
												西曆			文												銘文
												石材			西曆												西曆
												備考			石材												石材
												備考			備												備
												首欠落			豪潮建立												
												首欠落			相輪部の先端のみ												
												卵塔			現存												
												板碑状															
												板碑状															
												首欠落															
												首欠落															
												備考															
												備考															
												塔身のみ現存															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															
												備考															



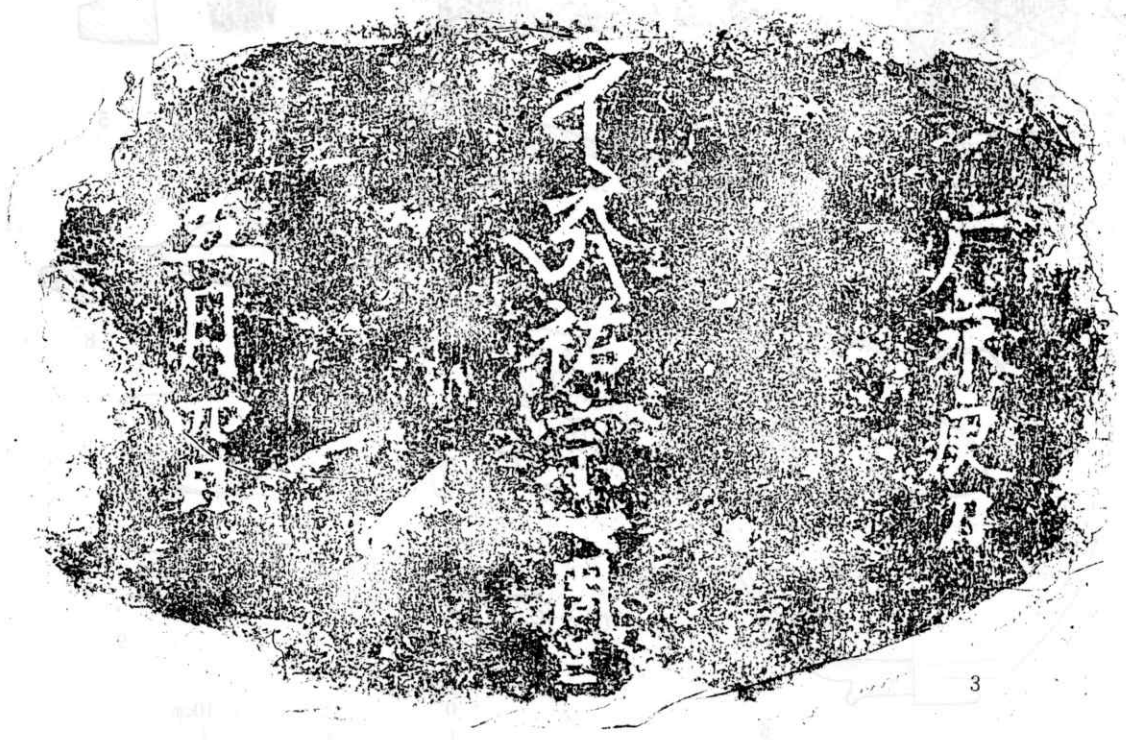
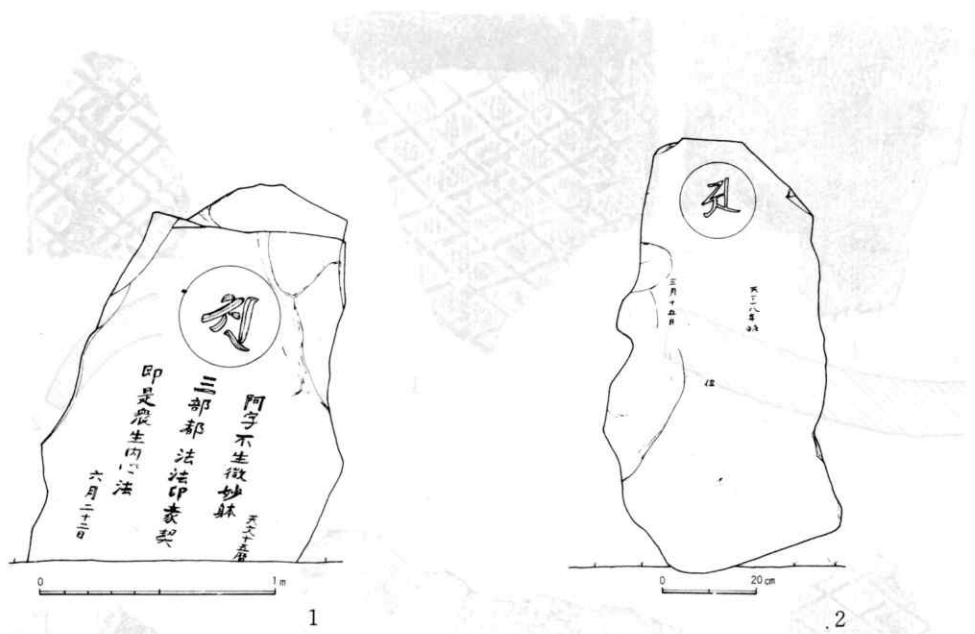
第7図 宝篋印塔・五輪塔実測図



図紙表 第 8 図 層塔実測図



第9図 常楽寺周辺の遺物



第10図 常楽寺周辺の石塔銘文 (1 天文15年 2 天文18年 3 應永17年)

(三) 常楽寺調査のまとめ

常楽寺に関わる最も古い記録は『元亨釈書』の泉涌寺俊苒に関する「州之味木県吏源憑」にはじまる記載であろう。この中には常楽寺の名こそ出てこないが「飯田山寺僧」とか「飯田之真俊」の名が出てくる。

今回の現地調査で、常楽寺及びその周辺を踏査、探索したが、最も時代的に遡るとみられる遺物は、本堂前の二基の層塔で、紀年銘こそないがこれは鎌倉期のものとみられる。『國郡一統志』の「羅（日羅）初在百済以九級塔材携来」の記事は同一石塔を意味するものと考えられるが、そこまで時代を上らせることは困難であろう。その材質が肥後でみることの少ない花崗岩であることから、或は畿内から運ばれてきた可能性もあろう。

今回の踏査で、本堂と歴代住職の墓地を隔てた凹地より、鎌倉期とみられる多数の布目瓦が採集された。それは初期の飯田山寺を思わせるものではあるが、詳細については今後の解明を俟たねばならない。

視点をかえ常楽寺周辺の古代遺跡をあげれば、まず上砥川、船井川の「阿弥陀石」がある。この石仏に宝治二年（1248）の刻銘のあることで知られており、これが同時代の常楽寺とどの様なかかわりをもつかは今のところ明らかでない。

『元亨釈書』に「味木県吏源憑」の名が出てくる。味木は即ち甘木荘を意味し、現在御船町に甘木の集落のあることからここを指すものとみられる。その近くの飯田山を正面に見ることの出来る下高野の「つづの山」では、町の土地造成が原因となり多量の泥塔が出土した。その際、青銅製経筒をも採集されている。甘木荘が俊苒ゆかりの地であるだけに、出土した経筒やおびただしい量の泥塔と常楽寺、とくに俊苒との結びつきを考えないわけにはいかない。

飯田山を正面に望むことの出来る丘陵の一角に「はなたて」というところがある。土山の小豆坂で、ここは『肥後國誌』に記すところの「当寺一ノ鳥居ノ迹ハ、土山村ノ南ノ野ニ塚二ツ双ヘル所ニテ、古へ飯田山ノ通路本堂迄一里アリ、此ヨリ山上迄ハ女人禁制ナリシ」（句点筆者）と同一場所を指すものとみられる。また同様な伝承をもつ呼び名の地名「はなたて」が、さきの「つづの山」の下方、古閑集落の横にあるのは興味深い。

常楽寺の開基について永田日出夫氏は、益城町『文化財資料』の中で平安後期として「比叡山の第47代座主に忠尋と云う方が居られました。忠尋の高弟の真俊と伝う高僧が、飯田山常楽寺を開基しています」としている。これは恐らく俊苒伝などからの記事からの判断とみられ、当を得た推断であろう。

永田氏の言うように常楽寺の開基が真俊の時即ち平安後期とした場合、ここには受け入れる側の場の問題が出てこよう。常楽寺と甘木荘とのかかわり、或は延暦寺と甘木荘との結びつきを考慮しないでよいのだろうか。

常楽寺での最も古い紀年銘石塔は応永2年(1395)阿闍梨祐専逆修の為の宝篋印塔で、ついで山城には応永17年(1410)とみられる五輪塔の地輪一基が飯村家墓地にある。此の他、文明11年(1479)、延得元年(1489)の紀年銘石塔があるが、板碑として天文15年(1546)、天正18年(1580)が中世の石造物である。

常楽寺にある仏像については、さきに熊本県美術館によって資料調査が行われている。^注それによれば木造薬師如来像については室町末期、ついで木造千手観音像及び木造日羅像は室町時代の作と認定し、現存する仏像で鎌倉期まで遡るものはない。

常楽寺の法燈は、近世以降昭和まで続いている。時代の変革に伴い、飯田にあって寺と運命を共にしていた集落は、大正10年頃にはまず最初の戸がむらを去った。それを合図とばかりに次々と村を離れ、戦後にはすべての村人は古巣を捨てて、麓の新屋敷等に移り住んだ。今では細々と、老人会の手で伽藍の清掃と管理が行われている。

常楽寺への主な参詣路は益城町土山からと、御船町浄行寺側からの道がある。とくに土山からの道筋には「一町地藏」があって、参詣者に対して道案内の役目を果している。一町毎に在ったとみられる石仏は現在19基が確認されている。これらの石仏は位置図のうえに点をおとし、写真には土山を起点にして順次番号を付した。参詣路に関するものとして、土山の西側の台地の上り口にあたる嘉島町井寺のむら外れの辻にも「右いでら左いいださん」とした道標が残っている。

飯田山は周辺の集落の者にとって、一つの国見山としての性格をもっている。正月元日には今でも山頂目がけて登り、初日の出を見る人々も少なくない。(緒 方)

注 『県内主要寺院歴史資料調査報告書(二)』1983 熊本県立美術館

益城町の中世山岳寺院関係文献史料

熊本大学教授 森山恒雄

一、飯田山・常樂寺関係文献史料

(一) 常樂寺関係由緒記（『肥後国誌』下所収）

木山
小池村

高千四百五十九石餘飯田村^山土山村秋永村下原村等小村アリ往古國主^謂此所ニ池ヲ掘テ農田ノ助トセシヨリ地名トス其池ノ迹栖本氏カ林中ニアリト云

飯田山 此山高山也山上ニ常樂寺又飯田村等アリ山坂甚タ峻ク姫

落シト云所アリ山中ニ風穴アリ頂ハ田口平ノ城迹又山ノ南ノ平

ニ田口彈正カ靈火トテ奇火アリ里俗説此火ノアラン程ハ田口村^{手申}繁昌スマシト云傳フ此山近傍ニタウ山高野山キヨツシ山等

ノ山巒アリ

田口平城迹 飯田ノ城迹ト云飯田山ノ絶頂田口平ニアリ城主田口

彈正ト云^{城跡ハ田口村之女子ノ墓ニ在}東ノ方岩壁ニ墓所アリ此山上ニ御池有ト云ヘト今考ルニ城内ノ用ニ堀ヲ穿チ天水ヲ取シ跡ニハアラ

スヤ

熊野權現宮 當村氏神也

天神社 水神社 年神社

常樂寺飯田山大聖院 台宗叡山延歷末寺府ヨリ四里アリ寺記ニ云

推古帝ノ御宇吉貴年中聖德太子ノ建立ト云傳ヘ堂宇莊嚴善美ヲ盡

セリ爾來繁昌シテ碩學ノ僧徒多シ洛東泉涌寺俊仍國師モ此山眞俊

カ弟子也元亨釋書曰州之味木縣吏源憑一日延飯田山寺僧讀大般若經憑以仍聰慧雖稚加僧員年十四從飯田之眞俊學顯密之教俊者台

嶺座主忠尋之上定也云々此寺中古權兵燹煨燼シ今僅カニ小堂ヲ建

テ其迹ヲ殘ス本尊千手觀音其外釋迦藥師不動二王大黒天山王白

山愛宕天神并日羅力持來ノ塔ニ基アリ二王ハ運慶カ作ナリシヲ

享保八年ノ春二王門失火アリテ二王モ燒失スト云境内ニ反ニ畝

寶永三年年貢免許也山上ニ小池アリ^{右ニ云田口平城用}住持實相坊カ時

寛永四年觀音堂再興幹縁ノ文云飯田山常樂寺百濟國日羅上人挿

艸之地也^{此處ニ此寺ノ遺蹟ニ在}往季披榛夷岳創一叢寺云々初上人凌

巨瀛臻有欲創佛寺之志願而九重石塔齋持船底而相處此山則安之

奇哉經千有餘歲今猶見在佛法最初靈區至聖宜鑑伽藍良有以矣ト

アリ私考ニ云日羅ハ百濟ノ沙門ニアラス日本紀ニ火ノ葦北ノ國

造刑部阿利斯登カ子達率日羅^{聖仁}號シ賢ニシテ勇アリ^{略且}

厩戸皇子ニ逢タル事正史ニ見ヘス僧虎關師練何ニ據テ書ルヤ元

亨釋書ニ載タル已來僧ノ如クトリナシ日羅大師日羅上人ナト、

稱ス一端按ニ今常樂寺ニアル日羅ノ像ト云ルハ日本紀ニ云ル處

ニ據ルヤ甲冑ヲ着馬上ノ体也又土俗ノ説ニハ日羅將軍ノ開闢ニ

ハアラス往古百濟國ヨリ日羅ト云ル碩智ノ僧吾朝ニ航海シ此所

ニ着船ス其齋來ル塔石即チ當寺ニアリ船覆ツテ即チ山ト成今船

野山ト云四十八人ノ水主ヲ神ニ祝ヒテ木崎村荒帆大明神ト云此

日羅上人當山ヲ開基シ山鹿郡杉村ニ日輪寺ヲ開闢ス各台宗也^{八代}

寺ヲモ開^{開ス}其後雅州ニ到リ愛宕寺ヲ開闢スト云リ當山ハ坂路甚タ峻シク

落シ^{由來}九折坂ナト云所アリ又山中ニ礪砥等品々アリ山麓砥川

村ノ上ニ胡粉ノ如キ白土アリ之レヲギチト云當寺一ノ鳥居ノ迹

ハ土山村ノ南ノ野ニ塚ニツ双ヘル所ニテ古ハ飯田山ノ通路本堂

迄一里アリ此ヨリ山上迄ハ女人禁制ナリシニノ鳥居迹ハ山下林

蔽ノ内ニ殘リシヲ近世其土ヲ在方用水ニ穿リ取りテ今ハ之ヲ知

ル人稀ナリ^{寺迹ニ}

(補) 事蹟通考編年考徵卷三云飯田山寺ハ天台宗大聖院常樂寺

ト號ス益城郡木山郷小池村飯田山ノ八合目ハカリニアリ開

基年代不詳^{又此處ハ開闢トス古ハ繁榮ノ精舎ニテ碩徳ノ僧侶多シ本}

尊ノ千手觀音ハ隋ノ世ノ作ト云其外佛像等古代ノ物殘レリ

小西行長燒却ノ後寛永四年小堂ヲ再建ス

(補) 飯田山寺幹縁ノ跋ニ云當寺修造至二十餘年及衰壞處今載

孟春太守源綱利公有御再興而和光增輝于世誠抽家國護御武運榮久懇精而已

飯田山常樂寺

寬文八年戊申六月日

實相坊

(二) 飯田山常樂寺由緒記 (『国郡一統志』所収)

飯田山常樂寺

飯田山者在府東南山高二千餘仞徑一里許有寺曰常樂西向九折敬達即位十二年百濟國日羅來本邦身放光神異不測聖德太子微服從諸童子入館見之羅指太子曰是神人也太子走去易衣而出羅再拜跪地日敬禮救世觀世音傳燈東方粟散國太子從容而謝之羅放光太子亦眉間出光謂左右曰我在陳彼為弟子常禮日天故有光輝羅初在百濟以九級塔材携來乃安此地今存石塔二基是推古十三年厩戸皇子故創此寺爾降相繼起者三百餘院顯密碩學其化甚宏俊苾芻者州之味木人縣思源憑養而為子十四從飯田真俊學顯密俊者台嶺忠尋之上足苾芻苦學精勤長後入宋蓋夫山之有名入亦不乏可謂道之盛者寺安千手大士并日羅像有釋迦藥師辨才天大黑愛染不動虛空藏毘那耶迦白山權現日吉天滿護法堂二王者運慶刻之威芒絕妙山頂有池天水上下教觀流通千八百八十五年

(三) 俊苾「元亨釈書」關係史料 (『新撰事蹟通考』)

卷之五所収)

健保六年戊寅先^(一)是僧俊苾創^(二)正法寺玉名部筒嶽一、宴^(三)居此、此年受^(四)請遷^(五)京師泉通寺、

元亨釋書曰、俊苾字不可棄^(註)肥之後州飽田郡人、母藤氏生而數日母棄^(註)樹下、經^(註)三日、無^(註)禽獸之害^(註)、其伯母往見^(註)之、以為祥兒抱歸付^(註)母乳養^(註)以^(註)故、苾自字^(註)不可棄^(註)、或問^(註)所由^(註)、曰十八部主中有大不可棄者、生棄^(註)池中^(註)一魚鼈載^(註)浮三日不死、然後、収育^(註)予生似之、故自名^(註)云、四歲時母與其舅池邊寺^(註)

珍曉一、童稚而有^(註)老成之量^(註)、七歲讀^(註)佛書^(註)、纔終、即誦、又暗書焉、九歲州之味木縣史源憑見^(註)其幼敏而無^(註)父、養而為^(註)子一名曰^(註)自然^(註)、一日憑延^(註)飯田山寺僧^(註)讀^(註)大般若經^(註)、憑

以^(註)苾聰慧^(註)、雖^(註)稚而加^(註)僧員^(註)、諸比丘讀^(註)至^(註)奇字^(註)、試問^(註)苾、應對詳悉諸僧顧歎異、共字^(註)之曰^(註)音義^(註)、十歲讀^(註)法華^(註)、六日而終十四歲從^(註)飯田之直俊^(註)學^(註)顯密之教^(註)、俊者台嶺之座主忠尋之上足也、苾苦學精勤邁^(註)於倫輩^(註)、十八落髮、十九於^(註)太宰府觀世音寺^(註)受具戒^(註)、出^(註)関西^(註)、往來南北二京^(註)、建久十年四月率^(註)秀賀二弟^(註)、附^(註)商舶^(註)泛^(註)滄溟^(註)、五月初著宋之江陰軍^(註)、建曆元年歸朝著^(註)長州安武郡^(註)、四月至建仁寺、二年各移^(註)崇福寺^(註)、自^(註)崇福^(註)歸本邦、棲^(註)筒嶽^(註)、伐^(註)松芟^(註)荆創^(註)一伽藍^(註)、號^(註)正法寺^(註)、當^(註)夷^(註)基跡^(註)、往々有^(註)礎石^(註)、苾以^(註)古基偶合^(註)為^(註)勝地^(註)、宴居^(註)于此^(註)、或授密灌^(註)、或宣戒法^(註)、往來緇徒常百餘員、建保六年^(註)、苾在^(註)筒嶽正法寺^(註)、味木縣辨慶夢入^(註)一山寺^(註)、空中忽有^(註)二神僧^(註)、告曰筒嶽之苾師者五百生修道之人也、汝蓋^(註)拜^(註)之覺後感喜詣^(註)寺謁疑密^(註)、此年受^(註)請遷^(註)洛東泉涌寺^(註)、嘉祿三年三月八日寂年六十二、後小松天皇勅贈^(註)大興正法國師^(註)

(四) 安富了心^(直)軍忠狀 (『深江文書』二五号)

安富下総入道^(心)軍^(忠)事

一 去永和二年二月廿五日、馳參肥前塚崎御陣以來、小城春^(日并改後)
一 肥後国志々木原・板井・一駄原・丸山・前原以下於在々所々御陣、致忠節、^(德)之、^(月)廿日馳參、同廿六日木野菊池之御勢仕之時、令御共舉、同六月廿二日、菊池次郎武朝要害熊耳城没落^(之)、同廿六日、為^(徒)等御対治御発向之間、於蚌隈之御陣、兩三ヶ年越年仕、致宿直警固^(事)

一 永徳三年九月八日飯田山^(七)御移之時、御共仕以來、迄于当御陣吉

野山、致宿直、所々向城之勤番役、抽忠節□、然早下賜御判、
為後證、粗言上如件、
至德元年九月日

「探題今河入伊達了俊」
「承了（花押）」

(五) 阿蘇惟歳書状写（『阿蘇文書』二一三〇〇頁）

又彼在所代管丹田水薩摩守、為案内者同道候、此状めしをき候
ハ、為後日可然存候、

飯田山就境事、市下出雲方、原常陸方、為使者被越候、如□□□相
定候、為後日簡要候、自□□□下田美濃守、井田筑前守、申□□光
永对馬方同前候、為後證各名字書付進候、委細御両使可被申候、万
吉恐々謹言、

文明十一年 紀
七月廿二日
阿蘇殿
惟歳 花押

(六) 大友氏戦記（『大友家文書録三』、『大分県史料33』第二部
補遺(5)』所収）

代古麓城代稱八代城、非是、於今□□□為證〇作盟書、相取書納□□□
又伊勢守書之、相良伊勢守城代善寺・佐々木宮内左衛門□□□
悪兵衛城代浦・西肥前守□□□及僧徒存藝所武者都合
一万餘□□□竿表、而断示凶、義陽不屑、放火於□□□
翌日分兵、使西肥守千餘兵使東掃部助二千餘兵
攻甲佐伊野野家領主□□□戰於坂中、伊津野〇敗走、伊津野
赤星一太入・申佐・宮津・被郡・田上□□□春〇別助義東
兵敗走、我兵追撃□□□甲斐武藏守・栗村□□□甲斐伊勢守□□□
於飯田山・梁■原■者陽日□□□岡・井芹・緒方

・鳥居・椎葉・林・杉田□□□斬存藝湘原家、惣殺相良兵、東
西□□□緒方喜藏得義陽意、而宗運作通□□□堅志田〇敵
兵聞大将戦死、引于善村桑□□□宗運賞□□□吉次
〇至畑□□□原謁宗運時、擊相良□□□存我里□□□處、後年佐
渡原加運治十一月□□□入唐時初御工作之、治部献之、大
友□□□能種弟之御舟城南原中刺今號相□□□誦
仁王経方申付守礼拝用□□□度御舟房行討取合戦間□□□
原四百人□□□
加賀守・原□□□井芹加賀守〇、反應嶋津使□□□降□□□運知、井芹
宗立依丹花瀬軍叶入道□□□付加賀守、其餘一日討□□□
立娘木山城主木山備後守艸二□□□運追於南郷表山〇斬二男三
運七十五代□□□尾藤目

(七) 木山紹宅關係史料（『拾集昔語』所収）

一紹宅木山城主之砌飯田山に花盛之時分參詣之處に山詣之仁人櫻之
花を枝其に手々々手折候を風覽候て

風よりもはけしき人の心にて
手ことに折しはなの枝かな
如此に詠しられ候を其頃賞翫申たると語傳候

(八) 『上井覚兼日記（下）』（二一九頁）
（天正十三年九月）

一朔日、虫氣出合候て、出仕不申候、然者本田刑部少輔殿呼申候て
此由并昨日於隈庄談合落着候儀共、可被申上之段申候也、秘書・
拙者談合申候て、最前より飯田山へ召置候地下衆之内、興呂木新
介、人数など付候て、曲者と聞得候、然者今分二召置候てハ、向
後御為二難成候、生害させ申候て可然之由、一兩日前武庫様御面

談二蒙仰候、并藏岡讚岐、是又田代宗傳へ腹を切せられへき由註進申て候なる、其上宗運役人之由候間、妄語の科と申、彼是生害可然之通候条、（書頭）御内談申、両手之衆にて興呂木兄弟・藏岡父子生害させ候、此由即申上候、何事なく科人成敗仕候、肝要之由也、此晚、忠棟當所移被成候とて、使預候、拙者と使進之候也、

(九) 常楽寺勸進状（『熊本県史料中世篇第四』所収）

「妙永寺文書」(三号)

鎮西肥後州益城郡飯田山常楽寺観音堂再興幹縁文

密以、飯田山常楽寺百濟国日羅上人挿草之地也、往季披榛夷岳創一叢寺、彼上人者、本朝敏達帝十二年癸卯、浮星槎渡滄溟、身放光明神異不測也、聖德太子妙年而微服潜幸、交諸童子入見之、上人指太子曰、是神人也、太子走去、易衣而出、上人再拜稽首曰、敬礼救世観音伝燈東方粟國、太子從客而謝之、上人放身光、太子亦放眉間光、謂左右曰、我在陳国彼為弟子、常礼日天故有光耀、群臣懼伯自此以来、太子是観音応化街譚衛話矣、初上人凌巨瀛臻、有欲創佛宇之志願、而九重石塔齋持船底、而相処此山則安之、事哉經千餘歲、今猶見在、弘法最初靈区、至聖冥鑿伽藍良有以矣、夫爾来朱樓紺殿簷牙高喙、頭密碩才蔓莖繁樹、住房之徒及三百餘輩、洛陽泉涌寺開基俊仍国師亦此山真俊之徒也、今算年数敏達癸卯至今茲丁卯一千四十餘歲、異域尊崇靈地、國中計瞻梵刹也、雖然四夷未恬、干戈蠶起、豺虎縱橫、而仏閣僧房神社宗廟、無一而全、或為寇賊破、或為兵火烧、佛書神器已作烏有、寄附田園亦為官稅、而殿堂門扉漸微、蕩落春雨洗鳥瑟頂、牆崩秋風吹鵝王跌、溪谷溝漭、柱根腐敗、山峰黢黢、梁棟傾斜、細霧霏霏、香灰既湿、朝烟不燃、片雲濛濛、燈火忽滅、夕月無影也、夫本尊十一面観世音、娑婆有縁導師、濁世応時尊而鬼神除幽之苦、鳥獸解孺狻之悲、若復有人一称名号、枉械枷鎖、随縛随脱、推落火坑、火變成池、漂流巨海、免龍鬼難、王難臨刑、刀段段壞、呪詛毒藥不能害身、甘露法雨除煩惱、伏風火災、消盡

靈恐、三十三化身、十九種說法、神力無辺、応化無盡、十方国土、無利不到、衆生依怙、當常瞻仰、孰尊加之哉、爰有一老人、哀愍草堂頹破、發大誓願欲再建之、而家無儻石儲、普頼四衆助力也、今時何時乎、一天治平、四海安泰、堯風舜雨、村村桑出、戸戸稼歌、奉加時至、修造必就、既城中之福業、併為国内之德政、文武両官縹素四輩、伏望、一針一草尺布尺絲、縱雖塵芥、早投筒中、縱雖涓滴必露筒底、積用為山、湛以成海也、我願若滿、衆望亦足、勦力共成風之功者歟、所以、所仰卅二相獨尊、永鎮土地之凶亂、所憑十一面大士、偏祝国家之泰平、仏日照避年、德風扇萬世、因茲捨財諸檀、其福超長者布金、施願良友、其功勝童子聚沙、昔日塗一泥者作檀弥離、施七錢人獲轉輪王、況再造大土寶座乎、若人有葵蕪向陽之思、豈我無桃季遏春之慶哉、在現世、則攘三災七難困厄、於当来則昇四士、一念寂場、親疎俱利、貴賤同濟、稽首敬白、

寛永四歲舍丁卯五月穀旦

（朱印）

常光寺比丘秋澗日収謹疏

(十) 『八代日記』所収史料

(1) 天文二十一年四月

同廿九日 甲斐信濃守飯田山ノコトク山中、

(2) 永祿五年

同四月十三日

津守之城落去、光永方合子之如、（志）光永方三男中務

少輔方今月上旬二御舟合参候而、御舟二被越候、今夜又光永宮内方親直二合参候、依夫津守落去、津守城番中務少輔方也、求麻・八代地躰御舟二合力相定候、其為礼義（一）、夕山大正庵御越候、親直ノ三男忍テ被越候、